実践理論が提唱するフラット・オントロジーとはいかなるものか

廣田　俊郎　関西大学

１．序

社会理論をめぐって実践転回が主張され、社会の秩序や動態を「実践」なる観点から解明しようとする取り組みが試みられてきた。その実践転回の主導者の一人であるシャツキ（Theodore Schatzki）が社会の秩序と動態について示した理論枠組み（Schatzki, 1996, 2001, 2002 など）は、Seidl and Whittington（2014: 1413）によって、マクロの面とミクロの面の双方を視野に含めたトール（tall）なオントロジー（存在論）ではなく、フラット（flat）なオントロジーに基づくものと位置づけられた。ところで、Schatzki（1996）では、自らの理論展開の先行者としてギデンズとブルデューを挙げていた。本稿では、二者の内、ギデンズに注目し、ギデンズとシャツキとでは想定する存在論のタイプが異なるにせよ、シャツキが構築した理論的枠組みの中に、ギデンズの理論的枠組みが反映されている面があるのではないかというリサーチ・クエスチョンに基づいて考察を行う。そのため、まずギデンズ構造化理論の基本枠組みを明確化し、次にシャツキ実践理論の各側面を検討し、その際、シャツキの理論枠組みの中に、ギデンズの理論枠組みがどのように反映されているかを検討する。そのうえで、シャツキ実践理論の理論枠組みは、どのような意味でフラット・オントロジーと見なされるのかを本稿で考察したい[1]。

２．ギデンズ構造化理論の理論枠組み

(1) ギデンズの構造化理論

ギデンズは、社会秩序の生成・変動過程の解明という問題意識のもとに、社会生活の生産と再生産を規定するものは何なのかという問いを設定し、その問いに答えるものとして、「構造」と「相互行為」との相互関連こそが、社会生活の生産と再生産を規定するとの構造化理論を提唱した（Giddens, 1976 訳「3 章 社会生活の生産と再生産」参照）。ここで構造とは、社会の全体に関わるものであり、何らかの因果的作用を社会構成員に及ぼすものなのに対し、相互行為とは社会を構成する個々人同士の間での主体的行為を表すものである。

まず「構造」を特色づける中心的なものとして、（物的生産に関わる）支配秩序が想定された。さらに、そのほかに、認知的秩序、正統的秩序も想定され（Giddens, 1976 訳：176）、そうした諸秩序を背景とする、意味づけ、支配、正統化などの方向づけがなされる

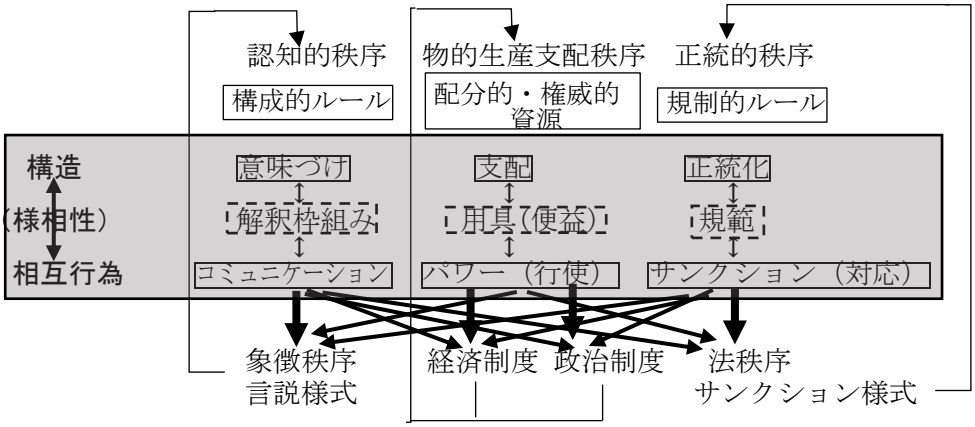
[1] シャツキは、組織についての実践理論に基づいた論考（Schatzki, 2005, 2006）も著しており、さらに Golsorkhi et al.（2025）による *Cambridge Handbook of STRATEGY as PRACTICE* の第 3 版では、当該分野での理論的リソース（社会理論分野）の一人として、ギデンズ、ヴィトゲンシュタイン、フーコー、ナラティブ・アプローチ、ドラマトゥルギー、ＡＮＴなどと並んで１章を用いて、その理論的枠組みが検討されている。

とともに、構造からはルールと資源がもたらされると想定された。構造からもたらされるルールについては、構成的ルールと規制的ルールとに区分された。構成的ルールは意味の構成に関わるものであるが、規制的ルールは社会的行為に関わるサンクションへのあり方を定めるものである。次に、構造からもたらされる資源は、配分的資源と権威的資源とに区分された（Giddens, 1984 訳: 296）。配分的資源とは、原材料や財のように配分可能な資源であり、それを活用して経済的活動が遂行される。他方、権威的資源とは、人に対して影響を及ぼすのが可能な資源であり、それを活用して政治的活動が遂行される。

他方、ギデンズ理論のもう一つの重要側面たる「相互行為」の担い手としての有能な行為者は、みずからが成員である社会について、広範かつ繊細な知識を有するとともに、構造的枠組みについての知識活用能力（knowledgeability）を有し（ギデンズ 1979 訳: 78）、自らの行為とその結果について、自省的モニタリング（reflexive monitoring）を行うとも想定された（Giddens 1984 訳: 227）。そして、そのような行為者が、その相互行為として、コミュニケーション、パワー行使、サンクション対応などを行うと想定された。

こうした相互行為が構造といかに関連づけられているかに関して、両者を媒介する様相性（modality）なる概念も想定された。構造からの意味づけを受けて、解釈枠組みという様相性を媒介として、人々の相互行為としてのコミュニケーションが展開される。さらに構造からの支配のもとに、用具（facility）[2]という様相性を媒介として、人々の相互行為としてのパワー行使が展開される。さらに構造からの正統化のもとに、規範という様相性を媒介としつつ人々のサンクション対応が展開されると想定された（図 1 参照）。

図1　ギデンズ構造化理論の基本側面



〔出所〕ギデンズ（1984 訳: 57）、ギデンズ（1979 訳: 118）をもとに作成。灰色で網かけされた部分がギデンズの書で示された部分であり、それ以外は筆者が追加したもの。

ところで、人間は、物質的世界の中で生き続けるために、その物質的世界を積極的に変えることを余儀なくされている（ギデンズ 1976 訳：145）。図 1 における中央列部分の支配－用具（便益）－パワー行使なる列は、構造がもたらす配分的資源を活用して経済的活動

[2] この用語の原語は facility であるが、ギデンズの訳書の多くでは、便益と訳されている。facility を用いることにより便益はもたらされるが、支配の対象とするのは、便益ではなく、用具だと解されるので、「用具」という訳を選んだ。

が繰り広げられること、および構造がもたらす権威的資源を活用して政治的活動が繰り広げられることを示している。ところで、諸活動において資源を用いる場合、どのようなルールを遵守する（rule-following）のが妥当なのか、すなわち行為の基準が問われる。そうした行為の基準に関わるルールについては、構造によってもたらされる構成的ルールと規制的ルールのそれぞれが経済的活動と政治的活動に適用される。また、図１における左端部分の意味づけ－解釈枠組み－コミュニケーションなる列は、構造からもたらされる構成的ルールの活用に基づくコミュニケーションの展開を示しており、それによって象徴様式や言説様式についての変化がもたらされ、それらの様式の変化は、構造における認知的秩序の再構成にフィードバックされる。また、図１における右端部分の正統化－規範－サンクション対応なる列は、構造からもたらされる規制的ルールの活用に基づくサンクション対応[3]を示しており、それに基づき、法秩序についての変化がもたらされ、それにより正統的秩序の再構成がもたらされる。ギデンズは、このような枠組みのもとに、ある構造のもとで方向づけられた相互行為のさまざまな展開が社会生活の生産と再生産をもたらすとの構造化理論を示したのである（Giddens, 1976, 1979, 1984）。

(2) 構造化プロセスを通じた社会的実践の生成

ギデンズは、このような構造化プロセスを通じて、社会的実践が組織されたものとしての社会システムの再生産がなされるとも主張した。ギデンズによれば、社会科学の基本的な研究領域は、個々の行為者の経験でもなければ、いかなる形式であれ社会的全体性の存在でもなく、空間と時間を越えて秩序づけられる社会的実践なのであり（ギデンズ 1984 訳：28)、そうした社会的実践が規則的なものとして組織化された社会システムなのである。ギデンズは、構造化原理を通じて、浅浮き彫り（レリーフ）のごとく浮かび上がってくるのは、社会システムであり、その内実たる社会的実践だと述べている（Giddens, 1984 訳: 199)。とはいえ、社会的実践が構造化原理を通じて浮かび上がらせられているとか、社会生活は、一連の《再生産された実践》とみなすことができると述べるのみであり（Giddens, 1976 訳：147)、社会的実践が構造化プロセスを通じてどのように生成されるのかについては、明示的かつ公式的な形態では論じてはいない。それでも、社会的実践が生成される諸局面については言及している。すなわち、「社会システムを構成する実践の中でもっとも深層にある諸実践は、制度である」とギデンズは述べており（Giddens, 1979: 65)、構造化原理を通じて、社会の各領域に、実践慣行としての諸制度が形成されると主張している。そして、そうした社会制度についての、非言説的ではあるが無意識では

[3] サンクションという用語については、Giddens(1976)では morality なる用語が用いられたが、Giddens (1979,1984)では sanction という用語が用いられた。ただし、この用語は規範を意識した相互作用の動きを示すことを意図したものなので、その意味では morality という用語の方がより妥当ではないかとも評価できるが、もしあえてサンクションという用語を用いるのであれば、相互作用をめぐる動きを示すには、サンクション(対応)と表現するのが妥当だと考えられる。

ない知識としての実践的知識に基づく行為の反復によって社会的実践が生成されると主張する。さらに、行為者がもつ知識活用能力には固有の内省的形態が備えられていることにより、社会的実践の再帰的秩序化がもたらされているとも主張する（Giddens, 1984: 3)。このように、ギデンズは、構造化原理を通じて、諸実践が結果として生成されると主張したのに対し、シャツキは、諸実践が現実に存在するとの事態に基づき、諸実践を明示的に理論的枠組みの構成要素として取りあげている。

３．シャツキ実践理論の理論枠組み

(1) 状況を反映する「生の状態」からもたらされる「行うこと」と「述べること」

シャツキは、ギデンズのように社会全体に関わる構造と人々の相互行為との相互作用という、社会全体を見すえた構図のもとに社会動態の考察を開始するのではなく、まず社会の営みは、人々の心とそれを踏まえて展開される行為に基づいているとの観点から考察を始める。ところで、心とは特定の属性をもつ実体、場所、領域であるとする考え方に対する批判が 20 世紀思想において示されるようになり、ヴィトゲンシュタインはこの批判の展開において重要な役割を果たし、「心」なるものは社会的に構成されると主張した。人々は、家庭での養育、近隣友人との交流、学校での教育などを通じて、身体的活動を行い、他者のパフォーマンスに関心をもち、反応するのを学ぶという社会的実践に関わる中で心の構造が確立される。そうしたヴィトゲンシュタイン的観点に立つシャツキは、ある人の心（mind）とは、その人を取り巻く物事がどのようであり、その人にとってどのように進展しているかを反映した「生の状態」であると主張する。そうした生の状態を自発的な身体的動きとして表したものが、「行うこと（doings)」と「述べること（sayings)」なのである。たとえば、ある人のまわりで、暴動が生じたりするならば、そうした事態に直面した人の「心」には、恐怖、興奮あるいは使命感といった、その状況に特有の「生の状態」が形づくられ、それに基づき、身体的に「行うこと」と「述べること」（直面した暴動に参加したり、あるいは巻き込まれないようにしたり、それに対する見解を述べたりすること）として表わされる。なお、生の状態を「行うこと」と「述べること」として身体的に表現する際には三種類の様相性（modality）[4]を経由すると考えられる。第一の様相性は顕在化（manifestation）であり、目には見えない「生の状態」が身体の動きへと顕在化させられ、感覚や感情、意識の状態が身体的に表現される（Schatzki, 1996: 43, Loscher et al., 2019: 3）[5]。第二の様相性は意味づけ（signification）であり、「生の状態」が、その人の「行うこと」

[4] この様相性（modality）という用語は、ギデンズが構造の面が人々による相互行為に変換される場合の媒介の面を表すために用いられたものと同一であるが、シャツキは、構造の面がではなく、人々の生の状態が、自らの「行うこと」や「述べること」などに身体的に変換されるときの媒介を示す用語として用いた。

[5] この心を身体へ顕在化させるという面に対応するのが、ギデンズの場合、構造による正統化を踏まえてサンクション対応という人々の相互作用がもたらされるという面である。両者の共通性は、構造ないし心の面を身体的動きに顕在化させるという点である。

や「述べること」という身体表現として意味づけされる。さらに第三の様相性は、道具（instrument）であり、身体を道具として用いつつ、特定の諸状況下で様々な行為が「行うこと」や「述べること」として遂行される（Schatzki, 1996: 42-44）[6]。ギデンズの理論枠組みでは、社会の全体的な構造によって、意味づけ、支配、正統化などの方向づけがなされ、人々の相互行為が引き起こされると考えるが、シャツキの理論枠組みでは、人々を取りまく状況によって作りあげられた人々の「心」による方向づけを受けて、人々の「行うこと」と「述べること」が示されると考える。シャツキは、このような「行うこと」と「述べること」が互いに連関したものとして組織化された行為のネクサスこそが諸実践（practices）であるととらえるのである（Schatzki, 2002: 77）。

(2) 諸実践

レクヴィッツは、諸実践を「身体活動、精神活動、モノやその利用、および以上の諸活動を支える背景知識をなすところの、ノウハウ、感情状態、動機づけ知識といった要素から構成され、日常生活にルーティン化したかたちで現れる行動」であると表現した（Reckwitz, 2002: 249）。この実践に関する説明は、諸実践を、①身体活動、精神活動、モノやその利用に関して日常生活にルーティン化したかたちで現われる行動、という面と、②それらの諸活動を支える背景知識をなすところの、ノウハウ、感情状態、動機づけ知識、という面とに二分している。①は、実践を構成する活動であり、②は、そうした実践を組織化し、持続させるものである。シャツキが、諸実践とは、組織化された行為のネクサスであり、「行ったり、述べること」（doings and sayings）が互いに連関させられたものであると主張する場合、それは上述の①についての説明である。ただし、諸実践は、上の説明での②に当たるものによって組織化され、持続させられる必要がある。シャツキは、そのような面として、実践的理解（practical understanding）、諸ルール（rules）、目的感情的構造（teleo-affective structure）、そして一般的理解（general understanding）を挙げ、それらにより、諸実践についての組織化がなされる（Schatzki, 2002: 87）と主張する。このように諸実践を組織化する側面についてのシャツキの理論構成は、ギデンズの理論構成から影響を受けている面があるのではないかと本稿では推察する。ギデンズにとって、構造とはルールと資源をもたらすというものであり、そうした構造からもたらされるルールに基づいて人々の相互行為が展開されると考えたように、シャツキは、諸実践が、それに関する状況のもとで通用する「ルール」によって組織化されていると想定した。ここで諸実践を組織化するルールとは、特定の行為を行うように人々に命じたり、指示したり、戒めたりする明示的な定式化、原則、戒律、指示を意味しており、「実践において次に何をすれば良いのか」を示している。次に、「目的感情的構造」とは、ある実践をめぐる目的、プロジェ

[6] この場合の、心が身体を道具として使用することにより「行うこと」や「述べること」として表現するのに対応するのは、ギデンズの理論的枠組みにおいて、資源を用具としてパワーを行使し、経済的、政治的な活動を行うという面であると本稿では解釈する。

クト、タスクが目ざすものについて、実践に関わるすべての参加者によって分散した仕方で支持される望ましさについての志向性や感覚である（Nicolini, 2012: 167）。これも、実践をとりまき、それを組織化するのに役立つ構造的なものの一面であり、シャツキも、それがギデンズのルールと資源をもたらす構造と類似ではあるが同一なものではないと述べている（Schatzki, 2002: 81）。同一でないのは、それが、諸実践をめぐる諸連関のレベルで見出されるという点と、構造からもたらされるのは資源ではなく、目的意識と感情的共感をもたらす目的感情的「構造」であるという点である。他方、シャツキの枠組みにおいて諸実践は、人々の諸実践についての一般的理解と実践的理解によって組織化されると想定されている。この面は、ギデンズが諸実践は、人々の実践的知識に基づく行為の反復によって生成されると想定したのに対応していると本稿では推察する。まず、シャツキが諸実践を組織化する側面の一つとして挙げた「一般的理解」とは、当該実践について、人々の間で共通に抱かれている理解であり、当該実践に関わる人々の共通の関心、運命の感覚についての内省的な感覚であり、「何のために当該実践に関わっているのか」についての理解である。それに対し、「実践的理解」とは、「いかにすれば当該実践を行うことができるか」についての理解であり、それを実践する仕方を知っており、実践する能力も備えており、実践の経験も踏まえて、当該実践の遂行を支えるような理解である[7]。

交通信号に従ってドライバーや歩行者が進行したり、停止したりする交通実践は以上の諸側面を通じて組織化され、遂行されていると解される。このように諸実践が行為者の側の理解や目的感情的構造によって組織化されているとの見解は、社会における諸部分は、それが全体社会に対して果たす機能の適切性によって存続させられているという機能主義的な考え方とは基本的に異なっている。人々が意味を見いだす諸実践が継続的に組織化されつつ追求され、そうした諸実践のネクサスとして社会が成り立っていると解されている。

(3) 人間、人工物、生物、モノについてのアレンジメント（配置編成）

シャツキは、諸実践については、それを支える人間的諸側面（実践的理解、目的感情的構造、一般的理解）を重視する一方で、そうした諸実践の連関とは別なレベルの存在として、社会秩序なるレベルの存在にも着目している。Schatzki（1996）によれば、社会秩序とは、人々の「生」が関連づけられたものであり、個々人のそれぞれが意味と居場所をもつように関連づけられたものでもある（Schatzki, 1996: 172）。ところで、人々の「生」の営みにおいては、他の人々との関係形成・利用だけでなく、モノの利用も行われる。そう考えた場合、社会秩序を単に人間の「生」が関連づけられたものとして定義するだけでは十分

[7] これについては、ギデンズが、フロイトの自我、超自我、イドという精神分析のトライアドに代えて、言説的意識、実践的意識、無意識という三区分を示した（ギデンズ 1984 訳：33）のが想起される。ただし、ギデンズによる三区分のそれぞれはフロイトのトライアドにそのまま対応するものではなく、実践的意識に最も近い精神分析の用語は前－意識（pre-conscious）であろうとしている。そのギデンズの実践的意識に対応するのがシャツキの考える「実践的理解」だと解される。

ではない。共存する人間が織り成す関連づけられたつながりには、人間だけではなく、人工物、他の生物、モノも含まれる。そこで、Schatzki（2002）では、社会秩序を、単に人間の「生」（human lives）の共存ととらえるのではなく、人々、人工物、生物、モノなどが関連し合って形成されているものであり、それらがさまざまな出来事や行為のコンテクストを形成しているとの見方を示した（Schatzki, 2002: 21）。すなわち、諸エンティティ（人間、人工物、生物、モノなど）が関係し合い、位置づけと意味をもつように関連づけられたアレンジメント（配置編成）として社会秩序をとらえようとした[8]。シャツキによる諸物のアレンジメントとしての社会秩序という想定は、ギデンズのルールと資源をもたらすものとしての構造という想定に対応したものだと本稿では解釈する。

人間、人工物、生物、モノなどのアレンジメント（配置編成）としての社会秩序は、さまざまな出来事と行為が生じる場合のコンテクストとなっており、そこからさまざまな社会生活が生み出されるが、その社会生活を通じて諸エンティティについての関係性、意味、アイデンティティ、相互の位置づけがもたらされている（Schatzki, 2002: 38）。例えば、交通実践を支えるアレンジメント（配置編成）には、信号機、交通標識、渋滞予測情報システム、自動車のナビゲーションシステム、道路交通法、信号制御システム、免許制度、道路設計規準、横断歩道、交通整理の警察官、などが考えられる。そのような諸エンティティについての配置編成としての「社会秩序」が、そのもとでの活動を制約したり、可能にしたりするとの影響を及ぼすなかで（Schatzki, 2002: 45）、諸実践が展開される。そうした諸実践のネクサスというコンテクストのもとで諸エンティティについての配置編成に関する新たな動きも生成されるのである。

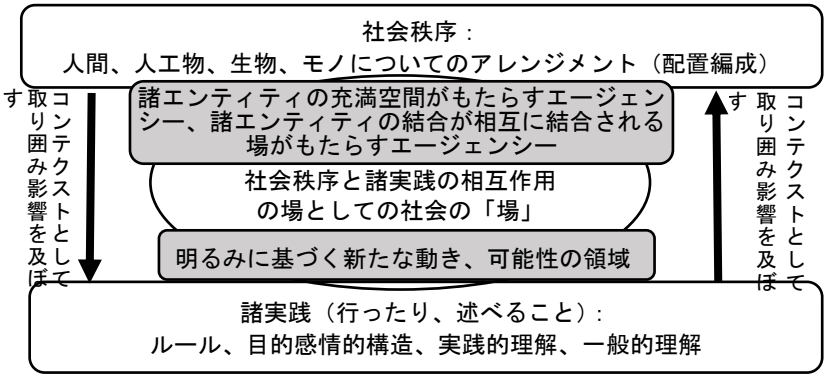
(4) 諸実践とアレンジメントの束がもたらす社会の「場」

さらに、シャツキの実践理論では、諸実践と、諸物のアレンジメント（配置編成）とが織りなす束が社会の変化をもたらす「場」となるとの観点を示し、そうした観点をシャツキは「場」の存在論（site ontology）と呼んでいる。そうしたシャツキによる社会の「場」という理論的想定は、ギデンズの理論的枠組みにおける「構造」と「相互行為」とを媒介する「様相性」なる概念の想定と対応するものであるとも解される。なぜ、そのように解釈するかといえば、シャツキによる社会の「場」は「諸実践」という行為的概念と「諸物

[8] アレンジメントなる語を「配置」と訳した場合、諸エンティティが空間的に置かれているとのイメージにとどまるが、「配置編成」と訳すことにより、諸エンティティがそれぞれに関わりながら、秩序形成がなされているとの語感を示しうると考えられる。このように諸エンティティが構成する社会技術ネットワークとして社会秩序をとらえようとする他の視点には、ANT（アクター・ネットワーク理論）が挙げられる（Schatzki, 2002: 22）。さらに、Schatzki（2002）は自らの枠組みとある意味では共通性をもつ枠組みとしてドゥルーズ＝ガタリ（1987 和訳:1994）に言及し、社会生活の中に見いだされるアサンブラージュ（集合体）は、人々、人工物、事物、それらのアクション、情熱などから成る権力の体制と、記号や音の使用としての言明の体制との結合であり、多様性をもつエンティティから成ることに言及している（Schatzki, 2002: 22-23）。

のアレンジメント」というエンティティ関連概念の両者が交錯する領域であるのに対し、ギデンズの「様相性」も「構造」というルールと資源というエンティティに関連する側面と、相互行為という行為的概念を媒介するものだからである。なお、シャツキが社会の「場」と見なすのは、次のように異なる諸側面の産物である。その第 1 は、ハイデガーの『存在と時間』に触発されたものであり、存在と了解可能性の「明るみ」（clearing; die Lichtung）をもたらすような社会の「場」である（Schatzki, 2002: 141）。「明るみ」（ハイデガー, 1994 訳（上）: 289）とは、人間が内に「照明」を含んでおり、暗闇の中で隠れている客体を光の中で見届けさせるという面に基づいて、物事を新たに出現させる空間であり、合理性とも規範性とも異なるものとしての実践的了解可能性（practical intelligibility）（Schatzki, 2002: 75, Schatzki, 1996: 192）なる観点から新たな動きがもたらされる場である。その第 2 は、可能性の領域である。ハイデガーの「明るみ」とは、以前には想定されていなかった事態が生成される場であるのに対し、可能性の領域はもともと可能なことが生じうる領域である。その第 3 は、相互に関連した諸現象が充満した空間（プレナム）である。そうした空間の構成要素は通常、異質な要素を包含しており、アクター・ネットワーク理論の主張と同様に、人、人工物、生物、モノ等から成る充満空間（プレナム）が新たな動きをもたらすような社会の「場」である。大規模言語モデル（LLM）が膨大なテキストデータの充満空間に基づき、何らかの答えを示すのもこの場合の例であると位置づけられる。その第 4 は境界をもつ領域において、諸エンティティの結合が複数生み出され、それぞれが独自の差異をもたらす場合、それぞれの差異を統合して全体的な効果を生み出すような場である。友人同士がコンピュータ・ゲームを楽しむ実践において、あるプレイヤーのさまざまなエンティティの結合が、他のプレイヤーの諸エンティティの結合と組み合わされる必要があるような場である（Schatzki, 2025: 7）。以上で述べた第 1 と第 2 の「場」は、人々の行為や実践に基づいて新たな動きがもたらされる社会の「場」の面を表すのに対し、第 3 と第 4 の「場」は、人間、人工物、生物、モノのアレンジメント（配置編成）に基づいて新たな動きがもたらされる社会の「場」の面を表している。以上の各面を有する「社会秩序と諸実践の相互作用の場としての社会の「場」」が社会についての新たな動きをもたらすうえで重要な役割を果たしているのを表示したものが図 2 である。

図２　シャツキ実践理論の基本側面

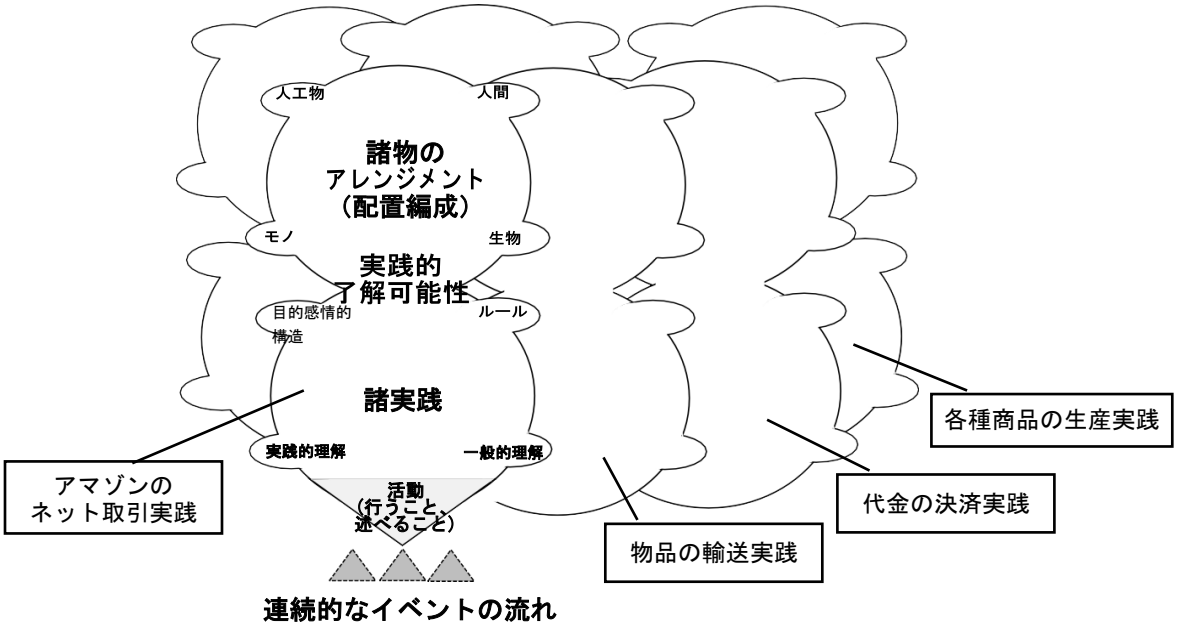


〔出所〕筆者が作成。

(5) Loscher et al.（2019）によるシャツキ実践理論の諸要素についての図表現

シャツキの実践理論の枠組みはフラット・オントロジーに基づいていると位置づけられることが多いが、今までに概説してきたように、シャツキの実践理論枠組みでは、社会秩序のレベル、諸実践のレベル、両者の束のレベルとさまざまなレベルの面を考慮に含めたうえで、諸実践の変化を論じている。もちろん、以上の諸レベルは階層的な相違を伴うものではなく、水平的に絡み合った異なる領域を示すに過ぎないとの見方も可能ではあろうが、普通にとらえるならば、諸実践と諸物のアレンジメント、および両者の束のそれぞれはレベル上の差異を伴いつつ相互関連しつつ存在していると理解できるので、シャツキの実践理論の枠組みは、純粋にフラット・オントロジーに基づいているとは言えないと見なす見解も生じうる。

図３　シャツキ実践理論の諸要素についての別な図



〔出所〕Loscher et al.（2019）p.122 における図に基づき筆者修正。

このシャツキの実践理論枠組みを、Loscher et al.（2019）は、図３のように示した。同図の再下部には、連続的なイベントの流れが示され、それを踏まえて人々の「行うこと」と「述べること」などの活動が繰り広げられる。そうした諸活動の連関としての諸実践は、ルール、目的感情的構造、一般的理解、実践的理解によって支えられているが、それらの諸実践を取りまく人間、人工物、生物、モノなどからなるアレンジメント（配置編成）も存在し、そうした諸物のアレンジメントと諸実践の両者が交錯する束の部分においては実践的了解性に基づく動きがもたらされている。その図３の左側部分に示された諸実践－アレンジメントの束の代表例の周囲には同様な構成をもつ他の諸実践－アレンジメントの束が重なり合いながら存在することが示され、それらは相互にリンクしていることも示唆されている。なお、ある諸実践－アレンジメントの束は、別な諸実践－アレンジメントの束と階層的にリンクしているのではなく、水平的な広がりをもってリンクしていると考えら

れる。たとえば、アマゾンのネット取引実践は、物品の輸送実践、代金の決済実践と相互にリンクしており、各種商品の生産実践ともリンクしている。そのような面を踏まえて、Loscher et al.（2019）では、シャツキにとっての社会的現実のレベルはただ一つであり（ミクロレベルとマクロレベルの区別はない）、すべての人間活動と全ての社会現実は、それぞれ絡み合った実践の中に状況づけられていると特色づけている。つまり、諸実践と諸物のアレンジメントの束は、同様な構成に基づく束と水平的なつながりを持ち、そのようなつながりが、幅広く社会に充満していると考える立場は、社会が、ただただ実践と諸物のアレンジメントの束の集まりとそれらのつながりによってのみ構成されていると考える点においてフラットなオントロジーの面を有しているとも解することができる。

４．シャツキ実践理論は、フラット・オントロジーに基づいているのか

シャツキの実践理論では、人間が「行うこと」と「述べること」の連関が諸実践をなしていると考えるが、そうした諸実践は、ルール、目的感情的構造、一般的理解、実践的理解などによって組織化されていると想定される。これらの諸実践を組織化する諸側面の中で、ルールと目的感情的構造は、諸実践に関わる状況に見出される側面であり、そうした状況をいわば上から組織化する側面である。それに対し、一般的理解と実践的理解とは諸実践を遂行する人々の目線から組織化する側面である。つまり、諸実践は、諸実践を遂行する人々を上からと下からとの双方から組織化していると言える。他方、そうした諸実践を取り巻く、人間、人工物、生物、モノなどについてのアレンジメント（配置編成）が諸実践のコンテクストとして存在し、諸実践と諸物のアレンジメントの束をなす領域は社会についての新たな動きをもたらす「社会の「場」」であると想定されており、その「社会の「場」」では、諸物のアレンジメントに基づく新たな動きが生じたり、諸実践に関わる行為者が見いだす「明るみ」や可能性の領域に基づく新たな動きが生じたりしている。そのように、シャツキの実践理論枠組みにおいては、まず諸実践自体が、上からと下からの双方から組織化されているのに加えて、諸実践、諸物のアレンジメント、諸実践と諸物のアレンジメントの束としての「社会の「場」」など、異なるレベルの存在が関わりながら、社会の秩序と変化がもたらされていると想定されている。その意味では、シャツキの実践理論は文字通りフラットなオントロジーに基づいているとは言えないとの見解が示されうる。とはいえ、シャツキの実践理論枠組みにおける諸実践と諸物のアレンジメントの束については、他の諸実践と諸物のアレンジメントの束と、水平的な広がりをもってリンクしていることが指摘されている。この立場からすれば、社会でのすべての動きは、何らかの形で、相互に関連し合う諸実践と諸物のアレンジメントの束のもとで生じているとも考えられ、そうした観点は、フラットなオントロジーを示すものだと本稿では位置づけたい。

References

Chia, R. & Holt R. (2006). Strategy as Practical Coping: A Heideggerian Perspective. *Organization Studies,* 27(5), 635-655. https://doi.org/10.1177/0170840606064

Fukushi, M. (2020). *Jizoku Kanou na Shouhi to Shakaiteki Jissen Riron*. Shufusya. https://shufusha.co.jp/ (in Japanese.)

Doleuze, Gilles & Félix Guattari, (1980), *MILLE PLATEAUX: Capitalisme et schizopherénie*, (Trans. Uno, K,, Ozawa, A., Tanaka, T., Toyosaki, K., Miyabayasi, K. and Morinaka, T. (1994). *Sen no Puratoh : Shihonsyugi to Bunretsusho*. Kawade Shobou Shinsha. https://www.kawade.co.jp/ in Japanese.)

Giddens, A. (1976). *New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretative Sociologies.* London: Hutchinson. https://hutchinsonpublishers.co.uk/（Trans. Matsuo, K., Fujii, T., and Obata, M. (1987). *Shakaigaku no Atarashii Houhou Kijyun: Rikai Shakaigakuk no Kyoukannteki Hihan*. Jiritsushobou. https://jiritsushobo.co.jp/ in Japanese）

Giddens, A. (1979). *Central Problems in Social Theory: Action, structure and contradiction in social analysis.* Berkeley: University of California Press. https://www.ucpress.edu/（Trans. Tomoeda, T., Imada, T. and Mori, S. (1989). *Shakai Riron no Saizensen*. Harvest sha, 1989. http://www.harvest-sha.co.jp in Japanese.）

Giddens, A. (1984). *The Constitution of Society.* Cambridge, UK: Polity Press. https://www.politybooks.com/（Trans. Monden, K. (2015). *Syakai no Kousei*. Keisou Shobou, 2015, in Japanese.）

Golsorkhi, D., Rouleau, L., Seidl, D. And Vaara, E. (Eds.). (2025). *Cambridge Handbook of Strategy as Practice* 3rd Edition. Cabridge University Press. https://www.cambridge.org/

Heidegger, M. (1927). *Sein und Zeit*. Max Niemeyer. (Trans. Hosoya, S. 1994. Sonzai to Jikan, Chikuma Gakugei Bunko. https://www.chikumashobo.co.jp/ in Japanese.)

Hirota, T. (2021). Social Innovation as Problem-solving Type of Morphogenesis of the Society: The Case of the Introduction of the Transportation IC Cards. *The Journal of the Japan Association for Social and Economic Systems Studies*, 40, 101-108. (in Japanese).）https://doi.org/10.20795/jasess.40.0_101

Hirota, T. (2022). Various Types of Change Generation Logics for Socio-Economic Systems -With Reference to the Examples of Changes associated with the COVOD-19 Pandemic -. *The Journal of the Japan Association for Social and Economic Systems Studies*, 41, 25-42. (in Japanese). https://doi.org/10.20795/jasess.41.0_25

Johnson, G., Langley, A., Melin, L. & Whittington, R. (2007). *Strategy as Practice: Research Directions and Resources.* Cambridge University Press. https://www.cambridge.org/jp/universitypress（Trans. Takahashi, M., Udagawa, M., Takai, S., Majima, T., Utashiro, Y. (2012). *Jissen toshiteno Senryaku: Aratana Paasupekutibu no Tenkai*. Bunshindou. https://www.bunshin-do.co.jp in Japanese）

Loscher, G., Splitter, V. & Seidl, D. (2019). Theodore Schatzki's practice theory and its implications for organization studies, in Clegg, S. & Pina e Cunha, M. (eds.). *Management, Organizations and Contemporary Social Theory.* Routledge, 115-134. https://www.routledge.com/

Nicolini, D. (2012). *Practice Theory, Work, & Organization: An Introduction.* Oxford University Press. https://global.oup.com/academic/?cc=jp&lang=en&

Parsons, T. (1951). *The Social System*. The Free Press. https://www.freepress.net/about (Trans. Satoh, T. (1974). *Parsons to Shakai Taikeiron,* Aoki Shoten. (in Japanese))

Reckwitz, A. (2002). Toward a Theory of Social Practices: A Development in Culturalist Theorizing. *European Journal of Social Theory.* 5(2), 243-263. https://doi.org/10.1177/13684310222225432

Schatzki, T. R. (1996). *Social Practices: A Wittgensteinian Approach to Human Activity and the Social.* Cambridge University Press. https://www.cambridge.org/jp/universitypress

Schatzki, T. R., Knorr Cetina, K. & von Savigny, E. (eds.) (2001). *The Practice Turn in Contemporary Theory.* Routledge. https://www.routledge.com/

Schatzki, T. R. (2001). Practice minded orders, in Schatzki, T. R., Knorr Cetina K. & von Savigny, E. (eds.). (2001). *The Practice Turn in Contemporary Theory.* Routledge, 42-55. https://www.routledge.com/

Schatzki, T. R. (2002). *The Site of the Social.* Pennsylvania State University Press. https://www.psupress.org/

Schatzki, T. R. (2005). The Site of organizations. *Organization Studies*, 26(3), 465-484. https://doi.org/10.1177/0170840605050876

Schatzki, T. R. (2006). On Organizations as they happen. *Organization Studies*, 27(12), 1863-1873. https://doi.org/10.1177/0170840606071942

Schatzki, T. R. (2016). Keeping track of large phenomena. *Geographisch Zeitschrift,* 104(1), 4-24. https://www.jstor.org/stable/45173996

Schatzki, T. R. (2025). Agency. *Information and Organization*. 35, 1-9. https://doi.org/10.1016/j.infoandorg.2024.100553

Seidl, D. and Whittington, R. (2014). Enlarging the Strategy-as-Practice Research Agenda: Towards Taller and Flatter Ontologies. *Organization Studies*, 35(10), 1407-1421. https://doi.org/10.1177/0170840614541886

Whittington, R. (2006). Completing the Practice Turn in Strategy Research. *Organization Studies,* 27(5), 613-634. https://doi.org/10.1177/0170840606064101

What does “flat ontology” in practice theories mean?

Toshiro HIROTA
Kansai University
hirota@kansai-u.ac.jp

Abstract:
Giddens proposed the structuration theory, and he asserted that the current structure provides resources and rules, and through the mediation of three types of modalities, three types of interactions such as communications, power exercises, and sanction responses, are performed, and such interactions may give rise to new structures. His ontology is characterized as tall ontology in that it includes both the structural (macro) and interactive (micro) aspects within its theoretical framework. In contrast, Schatzki presented a framework in which bundles of practices and material arrangements bring about various types of social changes. Such bundles of practices and material arrangements exist in society in various areas, and they are horizontally linked with each other to give rise to various larger social phenomena. A bundle of practices and material arrangements itself may not be characterized by a completely flat ontology. Nevertheless, in the sense that such bundles of practices and arrangements are horizontally linked to bring about social phenomena, Schatzki’s framework can be considered to have aspects of flat ontology.

Keywords:
practices, arrangement, intelligibility, tall ontology, flat ontology, site ontology